

やっと作り出せた友達との「居場所」が、就職や結婚を機に変わり…。

宮川拓也さん（草津市在住 28歳 男性 会社員）

拓也は生まれてから現在まで滋賀を離れたことがありません。長浜出身の彼は現在会社員として、草津市内のマンションで一人暮らしをしています。週末は大学時代からの仲良しメンバーと車で旅行に行ったり、キャンプしたり、そんな毎日を過ごしています。

幼少時代に育った地域は、子供会のような自治会活動のあるところ。当時大人しかった拓也は、そんな子供会のなかで周囲がふざけて遊んでいるテンションに合わせず、あまり楽しくない日々を過ごしていました。また、父方の実家に行くときも、そこでは昔ながらの男女の役割分担や酒を飲んで大騒ぎするような雰囲気。無理やり付き合わされるも「早く帰りたいなあ…」と内々思っていました。

そんな拓也も、高校、大学と進学するにつれて、自分を認めてくれると感じる友達に出会うようになります。無理に友達に調子を合わせる必要がないのは楽だと感じるようになる拓也は、自分と気の合う友達だけと集まる機会を自ら作るようになっていきます。企画することで感謝される、自分が必要とされる、そう感じることで「自分でここにいていいんだ」と思える、そんな安心感を自らつくっていくようになりました。

大学を卒業すると、そんな友達の多くは就職で県外へ離れ、滋賀に残った拓也と平日すぐに会える関係ではなくなっていきます。でも休日は相変わらずどこかに集まって遊んでいるし、LINE、Twitter ではいつも連絡しあう関係が続いていました。社会人になっても彼らとは離れず、こんな生活が続くものと思っていたのです。

ところが20代後半、友達の一人が結婚したことを機に、よく集まっていたメンバーで遊ぶ機会が減るようになりました。「自分が自分らしくいられる場って、高校や大学の友達と一緒にいるときくらいだなあ。結婚もいいけど、こういう関係性は変わらずにいてほしい…」。拓也がほしいのは、自分を受け入れられる、必要とされる、感謝される、そんな「居場所」なのです。でも今の生活には新しい出会いの場もなく…。

少しずつ変わりゆく友達との距離感、そして自分のこれから「居場所」に、拓也は戸惑いを感じ始めています。

